

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成16年12月5日発行(毎月5日1回発行)
第44巻12月号(通巻545号)

風土

12



夕 鴟

神 蔵

器

遠退^のきて母近づきて冬桜

ふるさとの一町二反水落す

火の匂ひあり過去帳も夕鴟も

石蹴つて竹に音あり秋のこゑ

色鳥来るふるさとの山浅くなり

菊薫る門にピーポー一〇番

きのふより今日空高し秋燕忌

回想

賜はりし猿の腰掛け桂郎忌

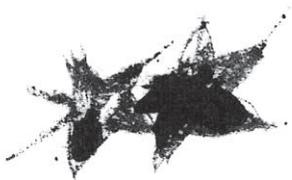
只見川ダム

水の下水激流す紅葉かな

ゆり大樹十一月の幹の立つ

银杏降る夫婦いちやうの阿吽かな

遠つ祖おやは田辺水軍月祀る



竹間集

同人作品



日和下駄

山路紀子

初秋の木曾路十一宿歩く
『夜明け前』序の章の一涼新た
鳥兜咲いて極楽平かな
木の実とぶ木曾のねずこの日和下駄
彩雲をあげ秋麗の信濃かな
子と遊ぶとんとん相撲虫の夜
雨台風風台風とつづきけり

柚子

岩木茂

屋月や尾花の靡く与謝郡
猪垣蕪村の母の墓を一枚はづしげんの墓
柚子ひとつ挽いで帰れとげんのこゑ
冷まじや潮を被りし稲刈りて
霧深く円空仏の御すなり
拾はれて明日香を出づる櫛の実
灯火親し師のこゑを聞く句集かな

十三夜

佐藤よしい

かりがねの渡りて墨の匂ひ立つ
寺の秋使はぬ部屋に風通し
山門の巾に風くる萩の花
足跡に霧の這ひよる墓参かな
豆干され葉草干され日の忙し
十三夜母逝きし年子は重ね
桂郎忌待つ竹林の薄明り

藻 塩

相沢有理子

遅き餉の藻塩利かせし秋刀魚焼く
嫁ぐ子に風のさゆらぎ葡萄熟れ
山容の暮色に沈むそぞろ寒
裏口に人来る気配霧の森
浅間噴く暁けの集落火山灰降り
たづたづしき夫の起居や虫しぐれ
芒挿し窓辺灯点す無月かな

秋深み

宮城 白路

穂芒や富士は含羞みがちな山
蟋蟀翔ぶ日に三便の滑走路
逃げ腰はいつも崩さず稲雀
葡萄食ふ神経質に種を吐き
予後三月みつきしみじみ虫を聴く櫛
満九十三歳十二月二日
一夜戸を鳴らす風あり秋深み

雁渡し

中谷 葉留

向島百花圃
新松子狂言塚の前に佇ち
あかときの雨気やなんばんきせる咲き
経師屋の奥に人声紫苑咲く
旅に買ふ大学ノート雁渡し
走り蕎麦一と日じまひの客となる
爽やかや礼して過ぐる郵便夫
二つ並ぶトーテンポール草の花

唐辛子

小林 輝子

参道へ出て実りたるまむし草
水漬く稲刈るや宗任柵の跡
田の色や沢内甚句口に出て
己が影のもつとも濃かり夕花野
燧道を音抜けてくる紅葉狩
鎌を研ぐ刈田二枚の先に山
畝の間に夜のいろ残る唐辛子

◇特別作品◇

道東の旅

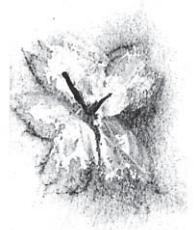
大川 智美

秋うらら家族で道東巡る旅
藍色の湖の深さや秋の風
小鳥来る湖水に映えて阿寒富士
アイヌコタン古式の舞や秋深む
ムツクリを鳴らす湖畔に秋惜しむ
秋寒しボツケの地熱石伝ひ
木の洞に入りてみたり秋うらら
熊避けの鈴付けてゆく紅葉狩
山径は木の根の階段小鳥くる

星月夜ランプを吊りし露天風呂
朝寒や島ふくろふの飛来の地
婚姻色現れたる鮭の遡上かな
冷まじや風化の巨木横たはる
横たはるトドワラ野菊咲き乱れ
湿原に丹頂鶴や秋日和
珊瑚草岸边まで火の這ふごとし
天高し根室十景巡りけり
爽やかや愛冠岬鐘響く
湿原に一両電車秋深し
秋夕日北の大地に沈み行く

山河集

同人作品



神蔵
器選

膝ついて二百十日の土ほぐす

間島あきら

改札を直線に出づ鬼やんま

生涯を頑周に徹す衣被

台風過伊吹嶺大きくなりにけり

二百十日板切れ渡る畑の口

千規の墓波山の墓も秋彼岸

中村 洋子

正岡家系図九代子規忌かな

朱の入る「はて知らずの記」子規忌かな

子規庵に「江戸しぼり」てふ萩咲けり

蓮の実の跳んで東寺の五重塔

休講のお知らせ届く九月かな

林 裕子

浅草に念珠を購ふも雁のころ

甲斐源氏城址にあそぶ良夜かな

秋灯のともるを待てる書齋かな
干し物を取り込む上や雁渡る

安永 圭子

棚経に犬も座りてゐたりけり

午後三時さやいんげんのスープかな

竹伐つて児の宿題に貯金箱

一束の鬼灯もまた厨の灯

金風やとつくり椰子置く相撲部屋

子規堂に乾く硯や萩の風

千枚田の中の一枚蕎麦熟るる

子を帰すやうに帰燕を見送りぬ

出番待つつ子方を煽ぐ秋団扇

どんぐりの落ちし遺構の柱穴

菅原 末野

子規庵の糸瓜ひいふうみいよつつ
奥田 茶々

地球儀は手のひらサイズ子規忌かな
眠られぬ火山灰降る村の花紫苑
秋風や和紙あてがひし箱枕
藤村の矢立に小刀雁の声

萩散るや檜皮湿りの能舞台
南奉 栄蓮
彌宜ひとり消ゆるばかりに萩の径

鳴門にて

秋澄めり渦潮かしぐ帆無船
讃岐富士裾糸曼珠沙華ロードゆく
秋桜翅あるものの集まり来

橋添やよむ

御仏を訪ふならみちの種茄子
古伊万里の蔵に眠れる望の月
廬山寺へ抜けみちのあり萩の露
藍の香の沁みる三和土やつづれさせ
糸瓜忌へ月の満ちくる日数かな

山本 浪子

赤岳の稜線尖る赤蜻蛉
赤とんぼ浅間山は灰を降らしけり
いにしへの噴石座る花野かな

栗飯の栗たつぷりや佗び住居
コスモスの奥より応ふ人のあり

三浦 てる

運動会組体操の子は波に
帰省子の大きな下駄を並べおく
ふれ費りの鈴銭熱き残暑かな
月今宵高樓遺る門前町
下校児と道連れとなり刈田風

平田 紀美子

蓮の実の飛んで鎌倉囃子かな
ペーパーウエイトは銀のうさぎや秋灯
海を見るほかはなき鬼の子下がりけり
望の夜のベランダに置く竹の椅子
「初恋を偲ぶ会」に招かれし夜長かな

小林 和子

母とその姑の播粉木とろろ汁
夕顔の花の十ほど闇の数
沈黙は多弁なりけり棟の実
菊食べて喉もと匂ふ二日月
ふるさとに父母見失ふ草の絮

風土集



神蔵 器選

万緑や火葉倉庫を懐に 藤枝 間島あきら

によつぼりと月を上げたる大花野

メタセコイアの本芯に二日月

火袋に猫眠りゐる残暑かな
水音へ夕かなかなの流れ初む
雁を待つ 雁ヶ腹摺山二つ 川崎 陣野今日子

谷川岳山頂

丈低き風の花野やトマの耳

水音を頼りに下る花野かな

雁坂峠秩父へ降る草の花

鈴虫の宵闇を待つ 翅立てて

秋祭隣町より祖母の来て 川崎 山本浪子

石鎚山の峰より晴るる秋祭

台風の回して行けり観覧車

きちきちの翔ぶや大きな空の下

牧の柵尽くる辺りや大花野
搾りたての牛乳分ける花野かな 東京 中嶋陽子

牛を呼ぶ男子学生竹の春

新涼やビクトリア種のいちごジャム

曼珠沙華吾子の書棚に「三国志」

紅を引く筆先にある秋思かな 調布 川井政子

一の橋二の橋渡り菱もみぢ 調布 川井政子

漁舟沖に出てゐる良夜かな

カンナ燃ゆ多喜二の住みし港町

初恋の啄木の歌碑赤とんぼ

町の名にコタンの名残り鱚雲

萩をはり日陰さびしくなりにけり 岡山 平田安生

吾亦紅手折りて旅の一会かな

稲刈つて敬老通知貰ひけり

結界の中へも飛火曼珠沙華